雜載

御前王子權現の紋は、劔かたばみに菊を用るなり、是はむかし、紋を附たるが劔かたばみにて有しをもて、牛の御前の神紋となせしとぞ、菊は後に、何ぞ由緒ありて付たるにや、

〔貞丈雜記五裝束〕紋を丸の内に畫事、永正年中、立雪齋が畫し諸家紋に、紋の外に丸を畫たる多く見えたり、家の紋の外に丸を畫く事、時により人の好みにもよる事にや、室町殿の紋は、五七の桐にて丸なし、是も諸家紋にみえたり、宗五大雙紙に、公方樣御腰物は、御目貫、丸の内つぶ桐燒付、又云、公方樣御打刀は、御目貫、前の如く丸に桐やきつけ、又御劔は、御目貫、丸の内桐燒付と見えたり、これをみれば、丸なき紋も、好みによりて丸を用る事もありしなるべし、諸家紋に、島津氏の紋十如此なり、何頃より歟、丸の内に、筆勢もなき十文字になりしなり、

〔諸家系圖纂五十四坂上〕田村氏家譜

家紋　桐　菊　車前草　卷龍　左三巴　有因緣而近代交用之、

蝶　梅鉢　此二紋者、庶子用之、

澤瀉　有所緣、家臣用之、

〔皇都午睡三編上〕元來江戸の作事は、略中土藏多きこと、町家うら〳〵に有うへ、河岸端は大方土藏にて建續きたり、略中往來の正面と裏手川の方とに、家號、又は店印、定紋などを、しつくゐにて置あげて、立派にあやどる、

〔有德院殿御實紀附錄十七〕有馬出羽守純珍、御前に出し時、朝比奈三郎義秀が紋は、何なるかと御尋ありしかば、鶴の丸とうけたまはりしと申けるに、そは中村勘三郎といへる俳優が、はじめて朝比奈が狂言せしとき、おのが紋をつけしより、あやまりて世人皆鶴の丸を朝比奈の紋と覺えたるなり、朝比奈が紋は、草合とて稻束を打ちがへしものなりし、その圖をかゝしめて下されしかば、出羽守甚だ感佩し、初て承りぬと申て退きしに、なほしばし留め玉ひ、我さきに日光山に參